

学位請求論文審査要旨

報告番号 甲 第 号

氏名 深田 愛乃

論文題目 『宮沢賢治の「教育思想」—近代仏教・大正新教育・農村との関係をめぐる思想史研究—』

審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部教授・大学院社会学研究科委員

修士（教育学） 眞壁 宏幹

副査 慶應義塾大学文学部教授

博士（教育学） 山梨 あや

副査 慶應義塾大学名誉教授

博士（教育学） 山本 正身

副査 大阪大学日本語日本文化教育センター招へい研究員

博士(日本語・日本文化) ブレニナ ユリア

I 概要

本学位請求論文は、宮沢賢治（1896～1933）の教育・仏教・農村に関する実践やテキストを 1910 年代～1930 年代前半の歴史的思想史的文脈に位置づけながら横断的に考察し、明示的には示されていない賢治の「教育思想」の輪郭を描こうとした研究である。

II 構成と内容

本学位請求論文は三部構成となっている。目次は以下の通りである。

序 章 近代仏教と大正新教育の関わりに向けて

第一節 本研究の背景と目的

第二節 先行研究の状況と本研究の位置づけ

第三節 本研究の方法

第四節 本研究の構成

第一部 賢治と近代仏教

第一章 岩手農村の〈近代真宗〉へのまなざし

—作品「復活の前」「霜林幻想」に見る暁鳥敏—

- 第一節 岩手農村の仏教における〈近代〉と〈伝統〉—東京へ学びに出た知識人青年層
- 第二節 文学形式の変遷と信仰遍歴の重なり—短歌から「心象スケッチ」へ
- 第三節 賢治の捉えた精神主義の思想—1918年（大正7）の断章「復活の前」
- 第四節 暁鳥敏による短歌の特質—1930年（昭和5）頃の下書稿「霜林幻想」
- 第二章 賢治の日蓮主義「受容」—『摂折御文／僧俗御判』の分析を通して
 - 第一節 『摂折御文／僧俗御判』について—「摂受と折伏」と「僧と俗人」の問題
 - 第二節 賢治の日蓮主義研究—田中智学の「研究案内」との関連性
 - 第三節 『摂折御文／僧俗御判』の内容—智学の著作から日蓮遺文への遡及
 - 第四節 智学を導きの師とした先に—「組織的研究」への展開
- 第三章 賢治と国柱会の「教育」—国柱会機関紙『天業民報』『大日本』を資料として—
 - 第一節 賢治と国柱会の事実的関係—三つの時期区分からの検討
 - 第二節 国柱会入会から農学校教師時代—第一期1920年（大正9）～1925年（大正14）
 - 第三節 羅須地人協会時代—第二期 1926年（大正15）～1928年（昭和3）
 - 第四節 病臥から東北砕石工場技師、晩年にかけて
 - 第三期 1929年（昭和4）～1933年（昭和8）
- 第四章 近代日本における仏教と教育への視座
 - 賢治による「大谷光瑞」批判を手がかりに—
 - 第一節 賢治作品に見る大谷光瑞の存在—「農民芸術の興隆」と口語詩稿「会食」
 - 第二節 同時代の大谷光瑞への評価と活動—「アジア主義者・軍国主義者」として
 - 第三節 『法華経』信仰から見る光瑞批判—「個」と「個」の連関からなる共同体
- 第二部 賢治と大正新教育
 - 第五章 岩手県における大正新教育の展開
 - 岩手県師範学校附属小学校・大迫尋常高等小学校を中心に—
 - 第一節 岩手県師範学校附属小学校訓導・佐藤瑞彦による実践—「生命育成」の自由画と読方教育
 - 第二節 岩手県師範学校附属小学校における「自学室」の経営
 - 教師と生徒による「協働」の研究
 - 第三節 大迫尋常高等小学校におけるドルトン・プラン実践
 - 成城小学校との関わり・「藤田式息心調和法」
 - 第六章 新教育思想の「農」への展開—賢治の教育実践と親友・藤原嘉藤治の教育論—
 - 第一節 農学校における賢治の教育実践—新教育的発想の具体的な表出として
 - 第二節 藤原嘉藤治の教育論を手がかりに—「宇宙生命」を背景とする「農の生活」
 - 第三節 盛岡高等農林学校の「教育学」講義—岩手県師範学校校長・小林鼎の存在
 - 第七章 大正新教育と宗教思想—「下種」の思想を基点とする賢治童話—
 - 第一節 「種を播く」発想に基づく表現と「下種」論—賢治による日蓮主義研究のその後
 - 第二節 島地大等の天台本覚思想論から「事の一念三千」へ—賢治の信仰遍歴をもとに

第三節 「真理」への接近を誘発する賢治童話——「教え導くこと」への自戒

第四節 キリスト教信仰者・佐藤瑞彦との対照

——綴方・作文教育「創作」と賢治童話

第三部 賢治と農村

第八章 岩手国民高等学校と農本主義——社会教育主事・高野一司との関係——

第一節 岩手国民高等学校の性格——1920年代の「農村教育」の潮流

第二節 賢治周辺の「輪読会」と芸術系科目——花巻の学校教師による交流

第三節 高野一司による農本主義的発想との相違

——古神道にもとづく農村改良との対照を通して

第九章 羅須地人協会時代の実践——宮沢一族をめぐる政治状況を背景として——

第一節 農学校教師から羅須地人協会時代へ——農村での教育対象の広がり

第二節 農村教育活動の展開——新教育思想との関連性

第三節 岩手農村における宮沢一族の位置——岩手の農業と社会主義思想

第十章 賢治の「農民芸術」論——日蓮主義的『法華経』理解を基底として——

第一節 「農民芸術」論の普遍性志向の背景——梅野健造の証言への着眼

第二節 「農民芸術」講義に見る仏教信仰——伊藤清一「講演筆記帖」より

第三節 『日蓮聖人御遺文』への書き込みと「事の一念三千」

——「科学から信仰への小なる橋梁」へ

補 論 賢治の文学作品に見る「教育」——法華経信仰との関わりを探るために——

第一節 賢治が批判した教育内容

——「〔或る農学生の日誌〕」「〔フランドン農学校の豚〕」

第二節 教育者としての意識

——「鳥箱先生とフゥねずみ」「〔或る農学生の日誌〕」「台川」

第三節 賢治作品に見られる教育と学習の目的

——「ポラーノの広場」「グスコブドリの伝記」「グスコブドリの伝記」

終 章 「第四次元」の「共同体」概念の創造へ

第一節 東北農村と「銀河系」の二重写しの共同体

第二節 近代学校教育の包摂と超越

第三節 「インドラの網」を紡ぎ出す思想

初出一覧

謝 辞

文 献

本学位請求論文は、賢治の「教育思想」形成の背景をなした近代仏教の影響を検討する第一部、賢治の具体的な教育実践と大正新教育の関係を問う第二部、これらの基盤にあった農

村改良の問題から賢治の「農民芸術」論を考察する第三部からなっている。

第一部「賢治と近代仏教」(第一章～第四章)では、近代仏教が賢治の「教育思想」形成に与えた影響について、真宗から『法華經』、日蓮主義へと推移していった賢治の信仰遍歴の内実を段階的に追うことで明らかにしようとしている。賢治を取り巻く岩手花巻の〈近代真宗〉とは、知識人青年層が輩出する宮沢一族の社会的・経済的階層とも深く結びつくものであったが、賢治は、「新世界」の開拓に踏み込めず「現実停立」(暁烏敏「説教師」(『汎濫』1918年1月号、愚禿社、1917年12月、2面)の姿勢を特徴とする真宗大谷派の僧侶・^{あけがらすはや}暁烏敏(1877～1954)の精神主義思想には飽き足らず、『法華經』や日蓮主義で重視される現実社会への眼差しに目覚めていった。そして、この眼差しの獲得とともに創始された童話創作は、「新しい、よりよい世界の構成材料」(宮沢賢治『新校本 宮澤賢治全集 第12巻 童話V・劇・その他 校異篇』筑摩書房、1995年、11頁)を提供する一つ的手段であったことが明らかにされる。賢治の日蓮主義「受容」は、国柱会創始者・田中^{ちがく}智学(1861～1939)の導きに真摯に沿うことで、かえって日蓮や諸經典という原典へと遡る慎重な姿勢を示すものであったこと、そして「新文明」の「建設」(書簡番号50(宮沢賢治『新校本 宮澤賢治全集 第15巻 書簡 本文篇』筑摩書房、1995年、58～59頁)や「新しい、よりよい世界」を構想しようとする点では日蓮主義と共通しつつも、智学のように「国体」という観念や、賢治が批判した浄土真宗本願寺派第22代法主・大谷^{こうずい}光瑞(1876～1948)のように「国家」という概念を「個」に先立たせてはいないことを明らかにしている。

第二部「賢治と大正新教育」(第五章～第七章)では、第一部の考察を通して見えてきた「個」を重視する賢治の「教育思想」が、一見すると近しい関係にあるように見える大正新教育の実践や思想と何を共有し、どのような面で相違していたのかを検討している。賢治が関心を寄せていた岩手県師範学校附属小学校の佐藤^{みずひこ}瑞彦(1893～1981)や稗貫郡の大迫尋常高等小学校の菅原隆太郎(1879～1963)は、新教育の「自学」(ドルトン・プラン)の実践を自らの信念(信仰)や岩手という地域に根ざした形で展開させようとしていた。賢治は農学校生徒への自作の童話や詩の読み聞かせを行っていたが、こうした教育実践には瑞彦らがお伽噺の読み聞かせを学校教育で積極的に行っていたことと関連があるとされる。しかし、キリスト教信仰者であった瑞彦の人格としての子どもへの信頼と、賢治童話の潜在的な仏性への信頼は、重なりつつも異なるという。賢治童話の場合、瑞彦の実践と異なり、学校や社会という共同体を超え出て「個」が網目のように連関する「第四次元」に開かれた「共同体」概念の創造を指し示すものになっているからだとされる。また、親友で花巻高等女学校音楽

教師だった藤原嘉藤治^{かとうじ}（1896～1977）と賢治が共有していたのは、たしかに自然や「農」に結びつく「宇宙生命」という普遍的な存在と、そのなかで個々の生命が生きているとする生命観ではあったが、賢治の場合、近代自然科学を斥けるのではなく、宗教に基づきながらも科学との両立を目指していた点で異なるとされる。

第三部「賢治と農村」（第八章～第十章）では、岩手国民高等学校と羅須地人協会の時代に考察を移し、科学と信仰を架橋しようとした「農民芸術」論から導出される賢治の「教育思想」を考察している。岩手国民高等学校の主事・高野一司^{かつじ}（1888～1948）をはじめとする農本主義者は、農村改良を目指す点で賢治と共通しながらも、寛克彦^{かきいかつひこ}の古神道に依拠して「日本人」を強調、国民と国家は二者一如の姿をなすとする論理にもとづき開拓へと乗り出していった。他方、賢治は、山川草木に及ぶあらゆる生命がはかりしれない時間を超えて連関し合うとする生命観に根ざしつつ肥料設計によって土性にはたらきかけるという、農芸化学の知識に基づく農村改良に努めた。この点で両者は大きく異なることが論じられる。また、賢治は農学校では中農程度の農家の子弟を対象としたが、羅須地人協会時代には小作農や貧農へと対象を広げ農事指導を行った。賢治は岩手農村の置かれた厳しい現実を前にして個々の生活向上を目指し農村教育活動に励み続けたが、同時に賢治の「農民芸術」論は、自身の中に時空間を超えたあらゆる存在を含み入れ（「事の一念三千」）、〈対・近代文明〉や〈対・ブルジョアジー〉を超えた、「第四次元」の新しい芸術を創造していくという理念が述べられ、自然科学の力を個々の幸福のために用いつつ、「創造」を生じさせる「心の力」（「真空」）（伊藤清一「講演筆記帖」（宮沢清六他編『新校本宮澤賢治全集 第16巻上補遺・資料篇』筑摩書房、1999年、193頁）を信じ、そこへの働きかけを重視する思想を展開していたことが明らかにされる。

終章では、賢治の「教育思想」とは、「銀河系」へと広がりうる生命の連関を自己のなかに包含しつつ、この現実世界で個々の幸福を目指して実践に打ち込む地涌の菩薩に重ね合わされた「地人」という生き方を、そっと人々の心に届けるものであったことが明らかにされる。それゆえ、近代学校教育という枠組みを包摂しながらもそれを越え出ていき、戦前にありながらも「国家」や「国体」という共同体幻想をも解体し、新たな文化構築を絶えず駆動させるものであったと言う。もっとも、賢治自身が「国家」や「国体」を強調しない思想構造を有していたとしても、賢治という存在が農本主義の文脈で支持された事実を否定することはできない。しかし、賢治が童話作品に込めた、不輕菩薩の姿に表れた「末法の折伏・下種」を基底とする「世界全体の幸福」の探求は、あくまで「探求」という性格をとり続け

るものであり、この意味で、賢治の童話や詩は、真理を直接的に提示するのではなく、真理への接近を誘発し続けるものだと言う。それゆえ、そこには多様な解釈が入り込む空隙が存在し、賢治の「農民芸術」論が戦時下において農本主義的な文脈で用いられる歴史的事実が生じえたことが説明される。

III 評価

本学位請求論文は、花巻農学校や羅須地人協会を舞台に農村教育活動を展開したものの、明示的な教育論を残していない童話作家・宮沢賢治の「教育思想」を明らかにするべく、賢治の教育・仏教・農村に関するテクストや実践を1910年代～1930年代前半の歴史的思想史的文脈に位置づけ、その輪郭を描くことを試みている。その結果、この「教育思想」なるものが、賢治に大きな影響を与えた日蓮主義を基礎としながらも国柱会の教育観とは異なり、岩手で展開されていた大正新教育と「生命」「個性」を強調する点では共通しつつも「下種」「地人」という仏教思想を根底に置く点で独自であったこと、さらには農本主義や地方改良運動と同様に農村改良を目指したものでありながら、国体論的方向性とも異なる農村文化創出に努めた点で極めて独自なものだったことが、多方面にわたる丹念な一次史料の探索と解釈によって明らかにされている。本学位論文は、大正新教育研究や近代仏教研究、賢治研究に一石を投じる大変意義ある研究と評価することができる。具体的に以下その意義を述べる。

第一に、賢治の法華経信仰の含意を探る研究は従来よりなされてきたが、本研究は、賢治の幾重にも層をなす信仰遍歴のプロセスを文献実証的に示すことに成功している。近代仏教史研究と賢治研究に寄与する内容になっている。

次に、従来の大正新教育の研究では、「都市・新中間層」、「師範学校附属小学校」、「私立小学校」、そしてキリスト教主義の思想や教育との関連で検討される傾向が強かったが、本研究は宮沢賢治という存在をとりあげることで、「農村」、「中農層」、農学校及び公立尋常小学校、(近代) 仏教との関係において、「子ども」に限定されない「新教育」がどのように模索され実践されようとしていたのかを重層的に描出することに成功している。従来の大正新教育理解に新たな視点を提供するという意味で教育史研究としても意義がある。

第三に、賢治が「教育」ということばを用いる機会が稀であることを踏まえ、先行研究では必ずしも教育学の視点から検討されてこなかった事績や文献や史資料（賢治が読んだであろう同時代の雑誌や新聞、著作、賢治と関わった教育者や仏教者の日記や書簡）を丁寧に考察している点、賢治と交流関係のあった教育実践者たちの思想や活動についても丹念に分析しながら比較を試みている点など、賢治の「教育思想」を浮かび上がらせるため独特な方法を用いているが、この研究手法は、公文書をはじめとする行政資料のみでは追究することが困難な、近代教育の枠組みでは扱いづらい人物や実践の「教育思想」を歴史実証的に検討する上でヒントを与えるものであり、教育思想史研究における一つの方法を

提示したという点でも高く評価される。また、この方法によって示された知見は、教育史や仏教史はもとより、宗教思想史やメディア史、社会史など日本近代を扱う様々な研究領域にも寄与しうる内容になっている。

第四に、賢治の「教育思想」は、ある程度実定的に示しうる側面をもつものの、そしてそれを説得的に示しえた点にこの研究の意義はあるのだが、教育思想史的観点からすると、この「教育思想」なるものが、様々な教育構想や実践に触発されつつも、それらに還元できるものでなく、それらを反省し新たな実践を誘うような思想的審級を備えていること、そしてその審級の形成を促したのが、法華経的世界観に依拠しつつ個々の生命を大切にしながら「世界全体の幸福」を目指す不輕菩薩の姿と「下種」論という仏教思想であったことを示した点で高く評価できる。

公開審査会では以下のような質疑応答がなされた。

近代仏教（日蓮主義）を専門とする副査から、「国家」と「国体」についての賢治の理解に関する質問があった。それに対し、賢治の考える「国家」や「国体」については、史料制約があり、明らかにするのは困難だが、「国体」を題材とした作品などがあるので、それを踏まえて今後検討したいとの応答がなされた。また、日蓮主義（国柱会）と賢治における「教化」と「教育」の比較は重要な問題であり慎重に検討すべきであるとの指摘に対しては、たしかに「教育」と「教化」には次元の異なる意味内容が含まれるが、「教え導く」という共通点に着目し、賢治における「教育」と「教化」の問題を考察したとの回答がなされた。羅須地人協会時代の実践を賢治自身は果たして「教育」と考えたのだろうかという質問に対しては、普通の学校教育とは捉えられない実践も「教育」と解釈することで賢治の「教育思想」の独自性を浮き彫りにすることができると考え、そのことで、現代の「教育」概念の再考も促す可能性が出てくると考えたからであるとの回答がなされた。ほかにも、賢治自身の受けた小中学校教育、東京での都市生活の経験の影響、賢治の思想を捉える上でキーワードである「生命」「宇宙」「科学」などの意味の時代的変遷についても検討する必要性が指摘された。

近世・近代教育思想史を専門とする副査からは、賢治と「国柱会」との関係性に関する理解について、国柱会が法華経と「日本国体」との一体化を唱道したのに対し、賢治は宇宙や自然と共に生きる「地人」への方向性をとっており、両者の立ち位置には明確な違いが認められるとされているが、賢治自身は死に至るまで国柱会を離脱することはなかった。その理由をどう考えるかとの質問が出された。これに対し、国柱会も日蓮遺文へのアプローチを通して日蓮主義への理解を究めることを主眼としており、その意味で包容性・包括性を有していることを指摘した上で、日蓮遺文に依拠する信仰態度を貫くことで賢治は国柱会との思想上・信仰上の葛藤を回避しようとしたのではないかとの応答がなされた。また、「農民芸術」論を通して示された、「第四次元」の世界の創造へあらゆる存在を駆動させようとする賢治の思想は教育思想とも宗教思想とも見ることができるが、それをあえて賢治の教育思想と理解する理由は何かとの質問も出された。これに対し、本研究は賢治の「教育思想」を

学校教育にその基本型を見ようとする近代教育の枠組みとは異なる視点を有するものと捉える意図で考察がなされたため、あえて「教育思想」として扱ったとその理由が述べられた。近代教育史（社会教育史）を専門とする副査からは、宮沢賢治の使用した「ことば」、あるいは言語の問題（方言と標準語、エスペラントの問題）について質問がなされた。これに対し、賢治自身は、標準語による作品だけではなく、方言を利用した作品や劇なども創作しており、状況や場面など、様々な想定のもとで意識的に使い分けている。標準語、方言など様々な選択肢があるなかでこれらをどのように作品や活動に反映させているのかを明らかにすることは今後の課題であるとの回答が示された。そのほか、賢治の教育実践が「子ども」に特化しない「新教育」の構想を背景としているように見え興味深いが、これは、近代仏教における教育理解とどのような関係にあるのか、という質問もなされた。これに対しては、童話を発表した際の宣伝文には、当時農学校で教えていた生徒たちを連想させる「アドレセント」（青少年）を対象とする旨が盛り込まれており、教育の対象を広く捉えていた可能性がある。教育対象の広がりという問題は今後の課題にしたいとの回答がなされた。そのほか、賢治が地域の有力階層出身者であり在村知識人ではあるものの、所謂近代学校教育制度の「エリート」とまではいえないことから、賢治だからこそ達しえた「教育思想」があったのではないかとする質問もなされ、これも新たな課題であるとの回答がなされた。

公開審査会の一般参加者には近代仏教研究者や賢治文学研究者も含まれており、こうした方々からもコメントや課題が提出され、長時間にわたって様々な観点から熱心な質疑応答が展開された。深田君はいずれの質問に対しても、論文や具体的資料に依拠しながら丁寧かつ説得的な応答を行ない、審査担当者はもとより、参加者の多くからも多くの気づきと学びが得られたとの感想が寄せられた。

IV 審査結果

指摘された諸課題は、史料的制約に起因する問題や、今後の研究展開に求めるべき問題であり、本学位請求論文自体の価値を損ねるものではない。ないしは、今後の研究への強い期待から出された問題だったと言ってよい。したがって、審査員一同は、本学位請求論文が課程博士号（教育学）を授与するに相応しい論文であると判断するものである。